

〔研究ノート〕

メサイアの解釈と演奏 XIII

—— テキストに基づいてオーケストラと共に歌う演奏の模索 ——

「分析(8) 第40曲～第44曲」

中内 幸雄*

「XII. この世的な抵抗」

40. 詠唱 バス ハ長調～ホ短調

40. Air Basso C major～e minor

< 反発と騒動 >

Why do the nations so furiously rage

この第40曲のバスのアリアには、別にダブリンのスコアの付録として、第39小節より第96小節を省略し、それに7小節間のレチタティーヴを付加したヴァージョンがヘンデルによって書き残されているが、本稿に於いては元のヴァージョンを分析することとする。

次に主なモチーフを示す。

〔譜例1〕

α. Violino I



b. *Basso*

c. *Basso*

d. *Basso*

e. *Basso*

f. *Basso*

g. *Violion I*

h. *Bassi*

i. *Bassi*

j. *Bassi*

次に、モチーフの配列による構成の一覧表を示す。

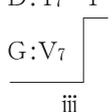
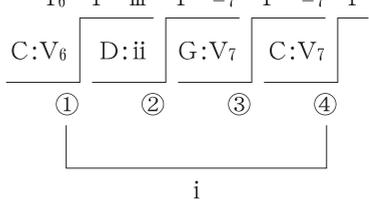
尚、モチーフaの変化形については、同系列と見なして基のモチーフaに含め、且つ、同記号の右下に数字を付す。そして、各モチーフの変形にはダッシュを、短縮形にはマイナスを各記号の右肩に付すこととする。

[表1]

第1展開

展開	小節数	1.	2.	3.	4.	5.6.	7.8.	9.10.11.12.13.14.						
I	区分	① 前奏 (a)		(b)		(c)								
	<i>VI. I</i>	α	f'	$\alpha^- f'$	$\alpha^- f'$	f''	$g f' f''$	$g f' f''$	$g \beta \beta d' d'$					
	<i>VI. II</i>	$\alpha^- f'$	$\alpha^- f'$	$\alpha^- f'$	f''	$g f' f''$	$g f' f''$	$g \beta \beta d' d'$						
	<i>Viola</i>	$\alpha^- g^-$	$\alpha^- g^-$	α^-	$\alpha^- g^-$	$g g$	$g g g^-$	$g \alpha \alpha \beta' \beta'$						
	<i>Basso</i>													
	<i>Bassi</i>	h	h	h	h	h h'	h h	h i	h d d					
	調性 転調楽節	<p>C: I₇ I v₆[#] I I₇ I I₇ I iv₇[#] I</p> <p>F: V₇ D: vii₆ G: V₇ C: V₇ G: vii₇</p> <p>① ② ③ ④ ⑤</p> <p>(b) (c)</p> <p>(b) ① (第5小節4拍~第6小節1拍) ② (第6小節2拍~同小節3拍) ③ (第7小節4拍~第8小節1拍)</p> <p>(c) ④ (第9小節4拍~第10小節1拍) ⑤ (第11小節4拍~第12小節1拍)</p>												

展開	小節数	15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29.
”	区分	i ii
	<i>VI. I</i>	α f' α -f' α -f'd'-d' f' α -f' α - α α α α f'f'b f' f'g
	<i>VI. II</i>	α -f' α -f' α -f'd'-h-h'f' α -f' α - α α α α f'f'b f' f'g
	<i>Viola</i>	α -g- α -g- α - α h-h' α α α α α α α b α -g g
	<i>Basso</i>	a b a ₁ a ₂ c b
	<i>Bassi</i>	h h h h h-h'h-h-h'h'h'h'h'h'h'h'h'h'h'h b h h
	調性 転調楽節	<p>G:I I ii₇[#] I IV₆[#] I -₂ I₆ I I</p> <p>C:V G:V₇ D:vii₆ G:V₂ D:IV</p> <p>① ② ③ ④ ⑤</p> <p>i ii</p> <p>i ① (第14小節4拍～第15小節1拍) ② (第19小節4拍～第20小節1拍) ③ (第20小節4拍～第21小節1拍) ii ④ (第21小節4拍～第22小節1拍) ⑤ (第25小節4拍～第26小節1拍)</p>

展開	小節数	30. 31. 32. 33.34.35.36.	37.38.39.40. 41.42. 43.44. 45.46. 47.48.
	区分	iii	②間奏 i
	<i>VI. I</i>	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \beta \quad \beta \quad d'$	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad f\alpha^{-}\alpha \quad f' \quad f''g \quad ff''g \quad ff''g \quad ff''$
	<i>VI. II</i>	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \beta \quad \beta \quad d'$	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad f\alpha^{-}\alpha \quad f' \quad f''g \quad ff''g \quad ff''g \quad ff''$
	<i>Viola</i>	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \beta'$	$\alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad \alpha \quad g^{-}g^{-}g \quad g \quad g \quad \alpha \quad g \quad \alpha$
	<i>Basso</i>	a ₃ c d	a ₄ b a ₅ a ₅ b
	<i>Bassi</i>	h-h-h-h-h-h-i h d	h h h h h h h h' h h h h
"	調性 転調 楽節	D: I ₇ I G: V ₇  iii (第29小節4拍 ～第30小節1拍)	- I ₆ I iii I - ₇ I - ₇ I C: V ₆  ① ② ③ ④ i
			i ① (第41小節4拍～第42小節1拍) ② (第44小節2拍～同小節3拍) ③ (第45小節4拍～第46小節1拍) ④ (第47小節4拍～第48小節1拍)

展開	小節数	49.50.51. 52. 53.54. 55. 56. 57.58.59.60.61.62.63. 64. 65.66.67.
”	区分	ii iii
	<i>VI. I</i>	$\alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \beta \beta d' d' \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>VI. II</i>	$\alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \beta \beta d' d' \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>Viola</i>	$\alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha g' \alpha \alpha \beta' \beta' \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>Basso</i>	a ₆ c e e a ₅ ' d a ₅ ' カデンツ
	<i>Bassi</i>	h j h-h-h-h-g h-e eh j i h d d h-h-h-h-h-h-
	調性 転調楽節	<p>c: I₆ I vi[#]₆ I - I - - IV[#]₇ I - I</p> <p>F:V₆ G:V₆ C:V G:vii₇ C:V</p> <p>① ② ③ ④ ⑤</p> <p>ii iii</p> <p>ii ① (第50小節4拍～第51小節1拍) ② (第52小節4拍～第53小節1拍) ③ (第54小節2拍～同小節3拍) iii ④ (第59小節4拍～第60小節1拍) ⑤ (第62小節4拍～第63小節1拍)</p>

第2展開

展開	小節数	68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78. 79. 80. 81. 82. 83.
II	区分	① 間奏 i
	<i>VI. I</i>	$\alpha \alpha g \beta d' \alpha g \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>VI. II</i>	$\alpha \alpha g \beta d' \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>Viola</i>	$\alpha \alpha g \alpha \beta' \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha \alpha$
	<i>Basso</i>	カデンツ a ₇ a ₇ ' c カデンツ
	<i>Bassi</i>	h h h i d' h h h h-h-h-h-h-h-h-h-h-h-h-
	調性 転調楽節	<p>iii₇ i</p> <p>a:v₇ (第74小節4拍～第75小節1拍)</p>

展開	小節数	84.	85.	86.	87.	88.	89.	90.	91.	92.	93.	94.	95.	96.	
"	区分	ii									② コーダ				
	<i>VI. I</i>	β	β	b^-	α^-	α	α	α	α	α	α	β	d'		
	<i>VI. II</i>	β	β	α	α	α	α	f'''	α		α	β	h		
	<i>Viola</i>	α	α	α	α	α	α	α	α	α	α	α	α		
	<i>Basso</i>	f		カデンツ		c					f	f		カデンツ	
	<i>Bassi</i>	i	h	h'	h^-	h	h	h	h	i	i	i			
	調性 転調楽節				$a:ii\#$	i									

(第86小節4拍
～第87小節1拍)

第1展開（第1小節～第67小節）は、第1区分（第1小節～第36小節）と第2区分（第37小節～第67小節）とで構成されている。

（注）このアリアの区切り方に関しては、弦楽器群と独唱部分の交錯が多いため、先ず明確な弦楽器群で区分を行い、ついでバスは、フレーズ開始のアウトタクトや、フレーズ末尾の弦楽器群と重なった箇所については、必要に応じてその都度文中にて詳述することとする。

第1区分（第1小節～第36小節）は、前奏（第1小節～第14小節）、第1部分（第15小節～第21小節）、第2部分（第22小節～第27小節）、小間奏（第28小節～第29小節）、第3部分（第30小節～第36小節）で構成されている。

前奏（第1小節～第14小節）は、更に、(a)、第1小節～第3小節、(b)、第4小節～第9小節、(c)、第10小節～第14小節に細分されている。

(a)（第1小節～第3小節）の3小節間はこの曲全体を支配する十六分音符の喧噪を暗示するリズムを用い、先ずヴァイオリンIがハ長調でのモチーフ α の分散和音をもって、一気に1オクターヴ上昇する。それをヴァイオリンIIとヴィオラが2拍遅れて、モチーフ α の前半に、短縮されたモチーフ α^- をもって追従する。更に、低音部が八分音符のモチーフ h をもって持属音的なリズムで

上三声を支えながら進むという形で開始されている。

そして、第2小節2拍とアフタクトからはリズムに変化を加え、ヴァイオリンIでは、短縮された順次上行進行のモチーフ f' と、同小節4拍とアフタクトからの主音上に戻ったモチーフ α^- をセットにして2回繰り返している。但し、後者の第3小節2拍とアフタクトからのヴァイオリンIのモチーフ f' は、ヴァイオリンIIよりも三度高く設定されている。この間ヴァイオリンIIとヴィオラは、ヴァイオリンIに同調しているが、先ずヴァイオリンIとヴァイオリンIIについてのモチーフ f' 双方の関係を見ると、ヴァイオリンIIは前記の通りヴァイオリンIよりも三度下で平行進行し、一方ヴィオラは上二声の動きとは関係なく、跳躍しながら和音を埋めるためのモチーフ g^- を宛う形をとっている。

(b) (第4小節～第9小節)の6小節間のヴァイオリンI、IIについて見ると、先ず、モチーフ f' 、 f'' とモチーフ g がセットになって、3回繰り返されているのが分かる。

また、モチーフ f' は、(a)での第2、3小節に既出の通り、短縮された順次上行進行のモチーフであり、次のモチーフ f'' も分散和音で跳躍してはいるが、同じく上行進行の形をとっている。しかも、モチーフ f'' は、次の小節に来るモチーフ g による山型の分散和音形を先行する役割をも果たしているのである。

尚、ヴァイオリンI、IIはユニゾンになっているが、一方ヴィオラは和音を埋めながらの跳躍進行となっている。

この区間では、転調楽節が3箇所設けられている。即ち、[表1]に示したとおり、まず第5小節4拍～第6小節1拍にかけては、ハ長調の主和音上の七の和音をヘ長調の属七の和音と見て、第6小節1拍でヘ長調の主和音に解決している。

次に、直後の第6小節2拍に於いて、三点八音にシャープを付してヘ長調属和音の六の和音を作り、それを二長調七度上の六の和音と見て、同小節3拍に於いて二長調の主和音に解決している。

そして、第7小節4拍では、二長調主和音上の七の和音をト長調属七の和音と見て、第8小節1拍に於いてト長調の主和音に解決している。

尚、低音部は依然としてモチーフ h でもって上三声支えている。但し、第6小節のみはヘ音から二音へと順次下行するモチーフ h' としている。

(c) (第10小節～第14小節) の5小節間は、更に変化を加え、前奏としてのまとめのフレーズを作っている。即ち、ヴァイオリンI、IIを見ると、三度の音程をもって進行しているが、先ず第10～11小節に於いては、各1拍内でオクターヴの跳躍(但しヴァイオリンIIの第10小節1拍のみは短六度の跳躍)を持つ特徴的なリズムのモチーフ β を置いている。

次の第12～13小節においては、トリルを表すモチーフ d' を置き、カデンツを付加して第15小節1拍で閉じるという形をとっている。

尚、ヴィオラは、リズムに於いてヴァイオリンI、IIに同調しながらも、モチーフに関しては、第10～11小節はモチーフ α に、そして、第12～13小節は完全五度跳躍のモチーフ β' にと変更している。

この区間では、2回の転調楽節が見られる。即ち、1回目は、(b)区間の最後の第9小節4拍で、ト長調主和音上の七の和音をハ長調属七の和音と見て、第10小節1拍に於いてハ長調主和音に解決している。2回目は、第11小節4拍で、ハ長調四度上(F \sharp)の七の和音をト長調七度上の七の和音と見て、第12小節1拍に於いてト長調の主和音に解決している。そして、次なる第1部分の準備としてのカデンツを形成しているのである。

低音部では、第10小節にモチーフ h の代わりに、特徴的なラメント風バスの順次下行旋律のモチーフ i を置いており、後に現れるこの種モチーフの先駆けとなっている。

以上の前奏の構成について、ヴァイオリンⅠとヴァイオリンⅡのモチーフの組み合わせを中心にみると、次の〔表2〕に示すように三部形式になっている。

〔表2〕

小 節 数	1. 2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.	14.
<i>Violino I, II</i>	a f	α ⁻ f	α ⁻ f	f' f'' g	f' f'' g	f' f'' g	f' f'' g	β β	β β	d' d'	d' d'	カデンツ	
区 分													
	a'		a	b		b	b	c		c'			
形 式	A			B					C				
	----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----												
	三部形式												

第1部分（第15小節～第21小節）は、前半の第15～18小節と後半の第19～21小節に細分されている。そして、前半のモチーフの配列は前奏での（a）の部分を殆どそのまま模倣している。但し、第15小節のヴァイオリンⅠは、独唱のバスにモチーフaの旋律を譲ったために、主音上に留まり持続音の形として控えている。

ところで、前半のバスは、前述のモチーフaと、ハ長調の音階を順次下行進行する形のモチーフbを組み合わせる山型のフレーズを作っている。そして、末尾は第18小節2拍で一応区切りをつけ、同小節4拍からは、後半のモチーフa'の開始音となっている。

第19小節より第21小節までの後半には各所に手加えられている。第一に、バスは第19小節1拍の二音から第21小節1拍の一点二音までの上行進行のみに止め、前半に見るモチーフbのような下行進行を省略している。第二に、弦楽器群では第19小節に於いてヴァイオリンⅠにはトレモロの形のモチーフd'を置き、ヴァイオリンⅡとヴィオラと低音部にはそれぞれモチーフh⁻とh'を置いて特徴付けている。

転調楽節を見ると、第1回目は、第14小節4拍で準備されたト長調主和音を、ハ長調属和音と見なし、第15小節1拍に於いてその主和音に解決している。第2

回目は、第19小節4拍で二点へ音にシャープを付したハ長調二度上の七の和音を、ト長調属七の和音と見なし、第20小節1拍に於いてその主和音に解決している。第3回目は、第20小節4拍で一点ハ音にシャープを付したト長調四度上の六の和音を、二長調七度上の六の和音と見なしてその主和音に解決している。

第2部分（第22小節～第29小節）は、弦楽器群では前半の第22～25小節と、後半の第26～29小節に細分されている。しかし、バスのパートの前半は、第22小節とアウフタクトより始まり、そのフレーズの末尾は、弦楽器群の後半の頭の部分、即ち、第26小節2拍まで伸びて重なっている。そして、後半では、後述するように全パートが特徴的な設定をしている。

第2部分では様々な変化が加えられているが、先ず前半の弦楽器群を見ると、ヴァイオリンI、IIとヴィオラはモチーフ α を4回並べ、持続音の効果を出している。それとは対象的に、低音部では、跳躍する音形を用いたモチーフ h' をこまぎれに8回連ねている。

特に、バスに於いては第23小節より3小節間は三連符のコロラトゥーラを用い、リズムに大きな変化を加えている。そして、非和声音の用法で不協和音を用いるなどして大胆な和声処理を行っている。

後半では、第26小節のモチーフ f' と第28小節のモチーフ f'' の間に挟まれた第27小節に於いて、モチーフ b を全パートでもってユニゾン奏法で強調している。この特異な作法も見落とせないが、これは第1部分の第17～18小節のハ長調でのモチーフ b を二長調に移調してそのまま模倣したものである。

そして低音部は、第27小節以外はモチーフ h に戻している。

転調楽節は、第2部分の前半の開始の箇所と、第25小節より第26小節への後半部分に移る箇所に設けられている。第1回目は、第1部分最後の第21小節4拍で用意された二長調主和音上の二の和音を、ト長調属七の二の和音と見て、第22小節1拍に於いてト長調主和音の六の和音に解決し、第2部分前半の調性へと誘導している。第2回目は、第25小節4拍でト長調の主和音を二長調の下属和音と見て、第26小節1拍に於いてその主和音に解決し、第2部分後半の調性の流れを作っている。

第3部分（第30小節～第36小節）は、形式的には第2部分を模倣する形で進められている。前半は、第30小節（バスはそのアウフタクト）より第34小節（バ

スはその3拍)まで、後半は第35小節(バスはそのアウフタクト)より第36小節(バスと低音部は第37小節1拍)までの二つに細分されている。

前半(第30~34小節)の弦楽器群は、リズムを揃えてモチーフ α を3小節に亘って連ね、続けてモチーフ β を2小節付加している。但し、ヴィオラはモチーフ α を更に第33~34小節と2小節延長し、ヴァイオリンI、IIのオクターヴ跳躍する激しく変化したリズムに対し、同じモチーフ α を継承し、前半のリズムの流れを統一する役割を果たしている。尚この用法は、前奏の第10~11小節に既出の形を模倣したものである。

低音部は、八分音符4個ずつひと纏めにしたモチーフ h^- を用いており、第30小節3拍より第33小節1拍にかけて、H-C-D-E-Fis-Gと順次上行進行している。そして第33小節に於いては、モチーフ i を用い、第34小節にかけて、今度はG-Fis-E-D-Cisとラメント風下行旋律を作っている。

後半(第35~36小節)は、形式的には第2部分を模倣しながら変化を加えている。即ち、第2部分の第27小節とアウフタクトから第28小節2拍にかけてのバスのモチーフ b の部分が、第35小節のバスに於いてはモチーフ d に変えられている。

そして、第35小節のバスのモチーフ d を、低音部はオクターヴ下で同じモチーフ d をもってこれを支えている。また、ヴァイオリンI、IIは三度の音程のトリルによるモチーフ d' でもってバスを装飾している。但し、ヴィオラのみは直前の第33~34小節のヴァイオリンI、IIのモチーフ β を変化させて、八分音符で完全五度の跳躍によるモチーフ β' を用いることにより、ここでも変化の中に統一を図るという重要な働きをしていることは見逃すことが出来ない。

かくして第36~37小節の短いカデンツを付して第1区分の第3部分を閉じている。

第2区分(第37小節~第67小節)は、小間奏(第37小節~第38小節)に続いて、第1部分(第39小節~第48小節)、第2部分(第49小節~第56小節)と第3部分(第57小節~第67小節)の三つの部分で構成されている。

小間奏(第37小節~第38小節)は、低音部のモチーフ h によるト長調の根音

に支えられて、ヴァイオリンIのモチーフ α による上行分散和音を、他の弦楽器群が同じモチーフ α をもって和音を埋める形をとっている。

第1部分（第39小節～第48小節）は、第39～42小節の前半と、第43～48小節の後半に細分されている。先ず、バスについて見ると、前半の第39～42小節2拍ではモチーフ a^4 とモチーフ b がセットになっており、後半の第43小節とアウフタクト～第48小節は前半を反復する形となっている。但し、ここでは次のような工夫が見られる。即ち、第43小節とアウフタクト～第44小節2拍はモチーフ a^5 と変化し、続く、第45小節とアウフタクト～第46小節2拍ではモチーフ a^5 を二度上げてハ長調から二長調に移調して繰り返している。更に、第47小節とアウフタクト～第48小節のモチーフ b は、第47小節1拍目を付点四分音符に変え、第48小節1拍で旋律をホ音に止めハ長調に戻すという操作をしている。

弦楽器群を見ると、前半の第39小節より第43小節の頭までは、第40小節と第41小節を境に二つに分かれている。そして、後半の第43小節2拍とアウフタクトより第48小節までは、第45小節の頭までと繰り返しの第47小節の頭までの部分と、第47小節2拍とアウフタクトより第48小節の二つの部分に細分されており、この箇所のみで小さな二部形式を形作っている。この形式については、第2区分の終わりに再度纏めることとする。

低音部は、各小節にモチーフ h が均等に配置されているが、第44小節のみにF-E-Dと三度順次下行するモチーフ h' を作り、繰り返しの移る繋ぎを特徴付ける旋律作りは興味深い。

ここでは転調楽節を4箇所設けている。第一は、第41小節4拍から第42小節1拍にかけて、ト長調主和音の六の和音をハ長調属和音の六の和音と見て、その主和音に解決している。

第二は、第42小節4拍から後半の第43小節1拍に移る箇所であるが、これは一時的転調とも考えられるため〔表1〕でも省略した。即ち、第42小節4拍のハ長調主和音をヘ長調属和音と見て、第43小節の属七の和音を經由し、第44小節でヘ長調主和音に解決するという見方である。

しかし第二としては、既述の通りこの箇所を一時的転調と解釈して、直前のハ長調の続きと見直し、第44小節2拍をその三度上の三和音と捉え、これを二長調の二度上の三和音と見て、同小節3拍で二長調の主和音に解決したものとする。

第三は、第45小節4拍の二長調主和音上の七の和音をト長調属七の和音と見て、第46小節1拍でその主和音に解決している。

第四は、第47小節4拍のト長調主和音上の七の和音をハ長調属七の和音と見て、第48小節でその主和音に解決している。

第2部分（第49小節～第56小節）は、第49小節より第54小節2拍の頭までの前半と、第54小節3拍とアウフタクトより第56小節までの後半に分かれている。

先ず、前半のバスでは、第49小節とアウフタクトよりのモチーフ a^6 と、第50小節より第54小節1拍までの三連符のコロラトゥーラによるフレーズ c が続く。そして、後半は、第54小節3拍とアウフタクトよりモチーフ e が2回繰り返されるという形になっている。

弦楽器群もバスに倣い、前半はモチーフ α を5回続け、後半は同じ流れの十六分音符のリズムで、しかもユニゾンでもってモチーフ e' を2回繰り返すという形をとっている。

低音部には特徴的な動きが見られる。即ち、第50小節より第54小節1拍までのフレーズ c の部分に於いて、頭の部分の第50小節とアウフタクトから第51小節1拍にかけては、 $C-D-E-F$ と順次上行旋律のモチーフ j を置き、フレーズ c の末尾の第53小節には $G-E-C$ と下行分散和音のモチーフ g を作っている。これらに挟まれた第51～52小節にはモチーフ h を4個並べ、旋律的にも $F-E-F-Fis$ と流れを作り、モチーフ j とモチーフ g の間の橋渡しをしながらバスのフレーズ c に巧みに対応している。尚、後半の第54小節3拍とアウフタクトよりモチーフ e が2回繰り返されるという形は、バスと全く同じである。

転調楽節を3箇所置いている。第一は、第50小節4拍のハ長調主和音の六の和音をハ長調属和音の六の和音と見て、第51小節1拍に於いてその主和音に解決している。第二は、第52小節4拍のヘ音にシャープを付したハ長調六度上の六の和音をト長調属和音の六の和音と見て、第53小節1拍でその主和音に解決している。第三は、第54小節2拍のト長調主和音をハ長調属和音と見て、同小節3拍でその主和音に解決している。

第3部分（第57小節～第67小節）は、大きく分けて前半の第57小節より第63小節までと、後半の第64小節より第67小節までの二つに区別されている。更に、細かく見ると第57～60小節、第61～63小節の二つ、そして、第64～65小節、第66

～67小節の二つにそれぞれ細分されているのが分かる。

まず、前半の構成について見ると、バスは、主にモチーフ a^{5'} とモチーフ d より成り、それぞれに短いカデンツを付加した形となっている。

弦楽器群のヴァイオリン I、II は、1小節間のモチーフ α に次いで、モチーフ β 、モチーフ d' そしてモチーフ α をそれぞれ 2小節ずつ続けている。

それに対してヴィオラは、ヴァイオリン I、II に同調しながらも僅かに変化を加えている。即ち、最初にモチーフ g' を置き、続いてモチーフ α 、モチーフ β' そしてモチーフ α をそれぞれ 2小節ずつ添えるという細かな配分をしている。

低音部では、最初の 2小節間に変化を加え、上行進行のモチーフ j とラメント風下行進行のモチーフ i を連ねて山型のフレーズを作っている。

転調楽節は 2箇所設けられている。まず、第59小節 4拍に於いて、へ音にシャープを付したハ長調下属和音の七の和音をト長調七度上の七の和音と見て、第60小節 1拍でその主和音に解決している。次に、第62小節 4拍に於いて、ト長調主和音をハ長調属和音と見て、第63小節 1拍でその主和音に解決している。

次に、後半の構成について見ると、バスはモチーフ a^{5'} に続いて、直ちにカデンツを付加して僅か 4小節で閉じている。弦楽器群もモチーフ α のみを 2回で終わっている。

低音部も 2小節間にモチーフ h⁻ を 4個配しているだけである。只注目すべきは、第65小節 3拍でへ音にナチュラルを付して元に戻し、バスとともにハ長調のカデンツを構成して第68小節からの第2展開に備えている。

そしてバスと低音部は、第68小節 1小節まで延長し、そのカデンツを解決すべき小節に、直ちに第2展開の開始部分を重ねるという特徴的な繋ぎ方をしているのである。

ここで、前述の第39～48小節の二つに細分された形式を次の表に示す [表3]。

[表3]

小節数	39. 40.	41. 42.	43. 44.	45. 46.	47. 48.
<i>Violino I</i>	α f' α^-	α f' f''	g f' f''	g f' f''	g f' f''
<i>Violino II</i>	α f' α^-	α f' f''	g f' f''	g f' f''	g f' f''
<i>Viola</i>	α α	α α^-g^-	g g	g α	g α
区分	a	b	a	a'	b
形式	A		B		
	二部形式				

第2展開（第68小節～第96小節）は、第1区分（第68小節～第91小節）と第2区分（第92小節～第96小節）とで構成されている。

第1区分（第68小節～第91小節）は、間奏（第68小節～第74小節）、第1部分（第75小節～第84小節）そして第2部分（第85小節～第91小節）に分かれている。

間奏（第68小節～第74小節）は、弦楽器群のみで、第68～69小節、第70～71小節と第72～74小節の三つに細分されている。

最初の第68～69小節は、第1展開第2区分の第37～38小節に既出のモチーフ α を、ト長調からハ長調に移調してそのまま模倣している。

次の第70～71小節は、個別に組み立てている。即ち、第70小節のモチーフ g は、第5小節或いは第43小節と同じ形で移し替えている。但し、ヴァイオリンIIは4拍裏で一点変口音を一点ホ音に入れ替え、そして、ヴィオラは3～4拍を同じ和音内で僅かに配置転換をしている。

そして、次の第71小節への模倣について、その元となっている第10小節と同じ

形の第58小節を見ると、ト長調への一時的転調であり、和声進行は、IV – --_2 – ii – --_2 となっている。これをハ長調に読み替えると、I – --_2 vi – --_2 となる。

ところで、模倣された第71小節を見ると、この箇所はハ長調への一時的転調であり、和声進行は同じくハ長調上で I – --_2 vi – --_2 となっている。

従って、模倣元と模倣先は、主調と下属調の近親調関係であり、移調することによる双方の和声進行は全く同一であると云える [譜例2]。

[譜例2]

第10小節 (第58小節)

Musical score for measures 10 and 58. The score is written for Violino I, Violino II, Viola, Basso, and Bassi. The music consists of rhythmic patterns with eighth and sixteenth notes.

和声進行 ト長調 IV – --_2 – ii – --_2
 (移調読替) ハ長調 I – --_2 – vi – --_2

第71小節

Musical score for measure 71. The score is written for Violino I, Violino II, Viola, Basso, and Bassi. The music consists of rhythmic patterns with eighth and sixteenth notes.

和声進行 ハ長調 I – --_2 – vi – --_2

間奏末尾の第72～74小節は、既出の第12小節その他から多少の変化を加えて模倣し、そしてカデンツを作って間奏の部を閉じている。

第1部分 (第75小節～第84小節) は、第75～78小節、第79～82小節と第83～84小節に分かれている。

まず、直前の第74小節4拍に於いて、ハ長調三度上の七の和音をイ短調の属七の和音に置き換えて、第75小節1拍でその主和音に解決している。

最初の第75～78小節について、先ず、バスを見ると、第75小節とアフタクトより第76小節1拍までにはモチーフ a^7 を、第77小節とアフタクトより第78小節2拍までにはモチーフ $a^{7'}$ を続けて一つのフレーズを作っている。

弦楽器群は、モチーフ α を4小節間続けている。但し、第76小節のヴァイオリンIのみは、モチーフ g を置くことにより、バスの同小節2～3拍の休止符による空白を埋め、併せてモチーフ a^7 とモチーフ $a^{7'}$ を繋ぐ役割を果たして

いる。

低音部は、モチーフhを3小節間続けており、その流れでラメント風下行旋律を作っている。

次の第79～82小節のバスには、僅かに変化を加えたモチーフcを置いている。

そして、弦楽器群は、3パートの4小節間をモチーフαで添えている。

低音部は、モチーフh⁻を4小節間に8個並べているが、特に第80～81小節はモチーフjをもって順次上行旋律を作っており、しかも、第80小節に於いては、一時的なハ長調への転調作業を行っている。

第1部分最後の第83～84小節は、単純なカデンツを構成しているが、第84小節に於いて次の2箇所に変化を加えている。

第一は第84小節のヴィオラである。即ち、第1展開第1区分第3部分後半の第35小節の箇所です。既に述べた通り、或るパートにリズムや旋律等に変化が生じた場合に於いて、他のパートが直前のモチーフを模倣しながら、音楽そのものの流れを中断すること無しに継承すると云う技法である。この方法は、他にも第1展開第2区分第3部分の第60小節のように各所に見られる。

ところでこの場合（第83～84小節）に於いて、ヴァイオリンI、IIが、モチーフαからモチーフβに変化しているが、第84小節のヴィオラは、モチーフαをそのまま続けて流れの統一を図っているのである。

第二は、低音部の第84小節1拍に於いて、イ短調のカデンツを確認した後、A-G-Fis-Eとラメント風順次下行旋律を辿りながら、次の第2部分に向かってホ短調の兆しを見せている作風は見逃せない。

第2部分（第85小節～第91小節）は、バスのパートで見ると、第84小節4拍とアウフタクトからのモチーフfに続いて、第86小節とアウフタクトから第87小節2拍までのカデンツの部分を含めた前半と、第87小節3拍とアウフタクトから第91小節2拍までのモチーフcによる後半とに分かれている。このモチーフcは全部で5回現れ、三連符のリズムで統一が図られているが、それらは僅かずつ手が加えられ、多様に変化している。三連符の中から旋律を引き出してみると次に示す通りである〔譜例3〕。

[譜例3]

I ① ii ²³

Basso

↓ ト長調

主旋律

Basso

iii ³¹

↓ ト長調

主旋律

Basso

① ii ⁵⁰

↓ ハ長調

主旋律

II ① i ⁷⁹

Basso

↓ イ短調 (一時的にハ長調) イ短調

主旋律

Basso

ii ⁸⁷

↓ ホ短調

主旋律

まず、弦楽器群を見ると、第85小節では直前のモチーフをそのまま反復しており、次の第86～87小節は、概ねモチーフ α を連ねているが、第86小節ではヴァイオリンIに於いて、モチーフ b' とモチーフ α に分割してカデンツに向かうための変化を付けている。

低音部では、転調楽節が見られる。まず、第85小節より第86小節にかけてホ短調への転調の兆しが見られるが、本格的な転調は1小節後に来る。即ち、第86小節4拍の二点二音にシャープを付したイ短調二度上の長三和音を、ホ短調の属和

音と見て第87小節1拍でその主和音に解決している。そして、この調性は最後まで持続されるのである。

尚、第87小節より第90小節1拍にかけて、モチーフhがE-Fis-G-Aと上行線を辿り、同小節3拍でこの流れをひとまず終止し、次の区分への準備をしている動きに注目しておく。

第2区分（第92小節～第96小節）は、第1区分の第3部分と見ることも可能であるが、コードに該当する部分であるため、ここでは独立した第2区分として見ることにした。

それに先だって構成上の検討が必要である。即ち、接続の方法が巧みに交錯しているため、コードへの入りは各パート毎に個別に見なければならない。

先ずバスは、第91小節4拍とアウフタクトより始まり、更に、このモチーフfは第92小節1拍へのアウフタクトとなっている。従って、バスはこれよりコードに入り、再度モチーフfを反復し、カデンツを付加して独唱部を閉じている。

弦楽器群は、第91小節3拍よりバスを誘導しつつ、同小節4拍でホ短調二度上の和音から第92小節1拍に流れ込んでいるため、コードの開始は第91小節3拍からと見ることが出来る。そして、ヴィオラはモチーフ α を3回反復して終わっている。しかし、ヴァイオリンI、IIには変化を加えている。即ち、第92小節はヴィオラと同じモチーフ α であるが、第93小節にはモチーフ β を置いている。続く第93小節に於いては、ヴァイオリンIにはモチーフ d' を、ヴァイオリンIIにはモチーフhを置き、第95小節の1拍で弦楽器群を締め括っている。

更に、低音部を見ると、バスのモチーフcの末尾を支えながら第91小節1拍で区切りを付けているようであるが、モチーフiから見れば、すでに第90小節4拍より始まっており、これよりコードが開始されていると考えることも出来るのである。

そして、低音部の注目すべき特徴は、第90小節4拍から第94小節1拍にかけて、モチーフiによるラメントバス風下行旋律が3回繰り返されていることである。それらは音域の関係で、第92小節1拍では短六度、第93小節1拍では八度上にとそれぞれ繰り返り上げられているが、それらを一本の旋律に繋ぎ併せると十四度に亘る順次下行旋律になっている〔譜例4〕。

次に、モチーフの配列による構成を示す。

尚、合唱部門が主体に書かれており、弦楽器群はコーラス・パートのいずれかを補助的に添える形となっている。従って、弦楽器群については、後奏以外は省略することとする。

また、オーボエ I、II もソプラノ・パートと全く同一であるため、これも省略する。

[表4]

第1展開

展開	小節数	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.	10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22.
	区分	①	②
	<i>Soprano</i>	a b a a'	c d d f f f f f
	<i>Alto</i>	a b a	c d d e e e e' e e e'
	<i>Tenore</i>	a b' a a'	c d d e e e e e e' e e e'
	<i>Basso</i>	a a	c d d e'
I	調性 転調楽節	C:I I ₆ G:IV (第4小節2拍～第5小節1拍) G:iv [#] ₅ I ₆ D:vii ₆ (第7小節3拍裏～第8小節1拍)	D:I I ₆ G:V (第10小節1拍～同小節2拍) G:vi V ₆ iii ₇ I ₆ D:ii (第19小節3拍～第21小節1拍) D:I ⁻⁶ / ₅ I G:V ⁻⁶ / ₅ (第21小節2拍～第22小節1拍)

第2展開

展開	小節数	23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.	35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.
II	区分	①	②
	<i>Soprano</i>	a a a a b ⁺ a	c b ⁺ d e' e e e
	<i>Alto</i>	a a a a a'	c d d
	<i>Tenore</i>	a a a b	c d d d' e' e e
	<i>Basso</i>	a a a a a	c d e e
	調性	G:vi I	G:I I
	転調楽節	(1) C:iii - ₃ ⁴ I V ₄ ⁶ I	(1) C:V I
	(第24小節2拍～第25小節1拍)	(第34小節2拍～第35小節1拍)	
	(2) C:VII _b I F:IV I ii V	(2) C:I iii I F:V	
	(第26小節2拍～第27小節1拍)	(第38小節1拍～同小節3拍)	
	(3) F:vi I C:ii I ₆ V ₆ - ₃ I	(3) F:ii I ₆ - ₃ C:v _b I	
	(第28小節2拍～第29小節1拍)	(第39小節3拍～第40小節1拍)	
	(4) C:vi I G:ii IV ₆ V ₆ - ₃ I	(4) C:vi ₇ I G:ii ₇ vii ₆ I	
	(第31小節2拍～第32小節1拍)	(第43小節2拍～第44小節1拍)	

第3展開

展開	小節数	45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54.	54. 55. 56. 57. 58. 59.
Ⅲ	区分	①i ii	②i ii
	<i>Soprano</i>	a c d d ⁺	a f
	<i>Alto</i>	a' c' f e e	a e' e'
	<i>Tenore</i>	a c' f f e	a e' e'
	<i>Basso</i>	a' c e e e	a e' e'
	調性 転調楽節	G:I I C:V (第47小節3拍～ 第48小節1拍)	

展開	小節数	59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67.
”	区分	③後奏i ii
	<i>Violino I</i>	a a c d
	<i>Violino II</i>	a f c d d
	<i>Viola</i>	a c c c f
	<i>Bassi</i>	a f f
	調性 転調楽節	C:I I ₆ - I G:IV V ₇ C:V (第62小節3拍～ 第63小節1拍) (第61小節2拍～第62小節1拍)

第1展開（第1小節～第23小節1拍）は、第1区分（第1小節～第9小節2拍）と第2区分（第10小節～第23小節1拍）に分かれている。

（注）区分については、合唱のパートを基本とし、直前のフレーズはその末尾まで記し、重なった場合は新しいフレーズの頭から次の区分として表記する。

第1区分（第1小節～第9小節2拍）は、モチーフaとモチーフbが一つのフレーズを作り、さらに、二つのパートがセットになって展開しているのが特

徴である。即ち、先行のパートが強拍の1拍目で出た後、後続のパートは1拍遅れて2拍目からこれを追う形となっている。尚、第6～7小節のモチーフbは短縮形で付加されている。

また、第1～7小節間は対位法的に進められているが、第8～9小節はモチーフaを変化させた形で和声的進行を成して第1区分を閉じている。この対位法的進行と和声的進行を組み合わせる方法は、後続の各区分のすべてに用いられている。

転調楽節は2箇所設けられている。その第一は、詳細に検討すると、第4小節2拍に於いて、ハ長調主和音に続く直後のF音にシャープを付してト長調への導音を作り、その同小節2拍裏の六の和音に続き同小節3拍裏で属和音とし、第5小節1拍でその主和音の六の和音という不完全終止を経て、同小節2拍に於いて完全終止の形であるト長調主和音に解決している。

第二は、第7小節3拍のト長調主和音に続くその裏で、四度上の和音のC音にシャープを付して六の和音を作り、この3拍裏の和音を二長調七の和音の六の和音と見て、第8小節1拍で不完全終止の二長調主和音の六の和音を経て、同小節3拍裏の属和音から第9小節1拍に於いて二長調主和音に完全終止の形で解決している。

第2区分（第10小節～第23小節1拍）は、新しいモチーフとそれらの組み合わせが見られる。即ち、四分音符3個と次の小節の頭の八分音符とで作るモチーフcと、1拍裏より次の小節の頭までで作るモチーフdと、更にそのモチーフdを反復したものと、併せて三つのモチーフがセットになっている。

そして、これらセットになった三つのモチーフによって作られた各パートのフレーズが、フーガ形式によって展開されていることも第2区分の特徴である。

先ず、第10小節よりテノールのフレーズが主題を開始する。続いてアルトのフレーズが2小節遅れて第12小節より応答する。このアルトの第13小節のモチーフdに対してテノールは、同小節3拍とアウフタクトより対旋律のモチーフeを添えている。そして、第15小節よりソプラノによって再び主題が始められ、これに対する対旋律にはアルトも加わり、テノールとは実音で三度の音程を保ちつつソプラノの主題に添えている。最後の締めくくりとしてバスに応答が現れる。

これに対してアルトとテノールは、依然として同じスタイルのモチーフeを連ねているが、ソプラノは第18小節1拍裏より新しいモチーフfを対旋律として宛っている。そして、第22小節ではテノールに変化を加えた以外は、全パートがモチーフfの和声的進行で、それまでの対位的進行を束ねて第2区分を締め括っている。

転調楽節は3箇所設けられている。第一は、第10小節1拍での二長調主和音をト長調属和音と見て、同小節2拍のト長調主和音の六の和音から同小節3拍でその主和音に解決している。

第二は、第20小節3拍のト長調七度上の七の和音を二長調三度上の七の和音と見て、第21小節1拍でその主和音の六の和音に移り、同小節2拍に於いてその主和音に解決している。

第三は、第22小節2拍に於ける前小節と同じ二長調の主和音をト長調の属和音と見直して、第23小節1拍でその主和音に解決している。

ここで自筆楽譜の興味ある修正に注目したい。それは、第10小節からの数小節の部分である。ヘンデルはこの第1展開第2区分に来て、先ず、バスパートからスタートし、テノール、アルトそしてソプラノへと移行するフーガ形式の構想を頭に描いていたことが筆跡から窺える。

それは、第10小節から第14小節までの斜線で消した部分に、先ず、バスパートが低音部と共に、主題をトゥッティの形で書き始めた跡があることで推測される。その後は、モチーフeを2回書き、歌詞繰り返しの省略記号と、第15小節に全休符を記入した所で止まっている。

ところで問題の箇所は、半円の弧線で囲った第12小節の部分であると思われる。この部分を見ると、同小節2拍の4個の十六分音符のうち、タイの次の2番目の十六分音符が一点ホ音に達し、合唱団のバスには少し高すぎる音域に達するといえることが分かる。

ヘンデルがこの点を問題にした上での処置であったか否かは計り知ることが出来ないが、更に自筆楽譜の訂正箇所を順を追って詳細に検証することとする。

第一に、問題の一点ホ音を避けて他の音に跳躍する処理法である。先ず、低音部の第12小節2拍目を八分音符2個に分割し、タイの一点二音から四度下のイ音に跳躍する方法であり、この試みはヘンデルがペンを置くことで中断している。

第二に、低音部のリズムを第11小節2拍より変更する方法を模索した形跡がある。それは、一段下の余白部分の五線への書き込みに見ることが出来る。先ず、第11小節2拍から八分音符でタイを受けた後、それまで4個の十六分音符を1単位としていたものを、2個の八分音符を1単位とするリズムに変更している。加えて、3拍目も付点八分音符と十六分音符を組み合わせたリズムに変更している。

第三に、本来のモチーフdそのものの旋律を改変する方法である。即ち、第11小節の変更後のリズムを受けて、第12小節に於いても、一点二音から一点八音を経てイ音に至るように下行進行させるという試みである。即ち、次の「譜表6」に見られるように、第12小節2拍の頭をタイで受けた後、同小節2拍裏の八分音符から順次下行進行させることにより、低音部とユニゾンで進むバスパートにとっても、無理な音域を回避することが出来、問題の解決に繋がることとなる。

しかしながらヘンデルは、試行錯誤の後結果的には、バスパートから主題を始める構想を取り止め、テノールから開始することに変更し、バスパートと低音部を除去しているのである。この自筆楽譜が、ヘンデルの作曲上の模索過程を窺うことの出来る貴重な資料となっている。

[譜例6]

ヘンデルの自筆楽譜

The image shows a handwritten musical score for five vocal parts: Soprano, Alto, Tenore, Basso, and Bassi. The score covers measures 10 through 15. The notation is extremely dense and complex, with many overlapping notes, rests, and scribbles, indicating a process of trial and error. The Soprano part is at the top, followed by Alto, Tenore, Basso, and Bassi at the bottom. The measures are numbered 10 through 15 at the top. The notation includes various rhythmic values and accidentals.

第1展開のモチーフの構成を説明文と重複するが、簡潔に纏めると、第1区分では、モチーフaとモチーフbが主体となっているということである。そして、二つのパートがセットになって模倣を繰り返していることは前述の通りである。

第2区分では、モチーフcと二つのモチーフdが一つのフレーズを作り、それが主体となってフーガ形式が展開され、それぞれにモチーフeとモチーフfが添えられている点も前に述べた。

第2展開（第23小節～第44小節2拍）は、第1区分（第23小節～第34小節2拍）と第2区分（第35小節～第44小節2拍）とで構成されている。

第1区分（第23小節～第34小節2拍）は、モチーフaが主体となって交錯し、転調も頻繁に繰り返されている。その調性を見ると、先ず、基調はト長調となっており、下屬調を順にハ長調からヘ長調へと辿り、次は属調関係でハ長調から更にD=連鎖の形で元のト長調に戻している。そこで、転調回数が多いためこれらを[表5]の通りに纏めてみる。

[表5]

小節数	23. 24.	25. 26.	27. 28.	29. 30. 31.	32. 33. 34.
調性	ト長調	ハ長調	ヘ長調	ハ長調	ト長調
転調楽節	基調G	Gの下屬調C	Cの下屬調F	Fの下屬調C	Cの属調G(基調)
回数	(1)	(2)	(3)	(4)	第34小節は、次の第35小節(目的調)に向けての出発調

上記の[表5]に示した転調楽節を、更に詳細に検証することとする。先ず、第1回目は、第24小節2拍のト長調六度の和音を、ハ長調三度上の和音と見て、同小節3拍裏で属和音の四六の和音から第25小節1拍でハ長調主和音に解決して

いる。途中の経過和音は〔表4〕を参照。

第2回目は、第26小節2拍の口音にフラットを付したハ長調七度上の和音を、ハ長調の下属和音と見て、同小節3拍裏の属和音から第27小節1拍でハ長調主和音に解決している。

第3回目は、第28小節2拍のハ長調六度上の和音を、ハ長調二度上の和音と見て、同小節3拍裏の属和音から第29小節1拍でハ長調主和音に解決している。

第4回目は、第31小節2拍のハ長調六度上の和音を、ト長調二度上の和音と見て、同小節3拍裏の属和音から第32小節1拍でト長調の主和音に解決している。

尚、和声的には上記の如く多彩に変化をしているが、モチーフaを主体に用いている手法は、第1展開の第1区分を模倣したものと見られる。

第2区分（第35小節～第44小節2拍）は、直前の第1区分の最後の第34小節に於いて、ヴァイオリンI、IIにより、第2展開の最初の第23小節を再現して開始している。そして、続くモチーフcとモチーフdの組み合わせ方やモチーフeの添え方も、変化を加えつつも第1展開の第2区分を模倣しながら展開しているのが分かる。

但し、第1展開の第2区分で用いたモチーフfは見当たらない。そして、フーガ形式も変更して模倣形式とし、各パートの並べ方にも工夫が施され、第1展開のそれよりも4小節短縮されている。

また、冒頭に記したように、スタカート・コーラスを強調するかのように、自筆楽譜の第1展開第1区分の第1小節のモチーフaの弦楽器群に、スタカートの記号が書き入れられている。これは、すべてのモチーフaをスタカートで演奏するよという意味で、当然のことながら以下同様という暗示である。

同じ例が第2展開第2区分に於いて見られる。ここでは、自筆楽譜の弦楽器群のモチーフcの箇所スタカートが記入されている。これも、前述の通りヘンデルが、特にモチーフcの箇所でのスタカートについて注意を喚起するために書き込んだものと思われる。

また、第42～43小節にヘミオーラのリズムを用いている手法にも注目しておく。

転調楽節は4回現れる。第1回目は、前述の通り第2展開の第1区分の最初の第23小節を再現している。即ち、第34小節のト長調主和音をハ長調属和音と見て、

第35小節でハ長調主和音に解決している。

第2回目は、第38小節1拍のハ長調主和音をへ長調属和音と見て、三度上の和音を経て同小節3拍でその主和音に解決している。

第3回目は、第39小節3拍のへ長調二度上の和音をハ長調属和音の短三和音と見て、第40小節1拍でのハ長調主和音の六の和音を経て、同小節2拍で主和音に解決している。

第4回目は、第43小節2拍のハ長調六度上の七の和音をト長調二度上の七の和音と見て、同小節3拍の七度上の六の和音を経て、第44小節1拍でト長調の主和音に解決している。

第2展開のモチーフの構成について、解説の文中と重複するが、簡潔に纏めると、第1区分では、モチーフaのみが主体となっている点が特徴となっている。尚、モチーフb(b')は、例外的に2箇所のみに付加されている。

第2区分では、モチーフcと異なった組み合わせのモチーフdが主体となっていることである。そして、それぞれの末尾にはモチーフeが付加されている。

第3展開 (第45小節～第59小節2拍)は、第1区分 (第45小節～第54小節2拍)、第2区分 (第54小節～第59小節2拍)と第3区分 [後奏] (第59小節～第67小節)とで構成されている。

第1区分 (第45小節～第54小節2拍)は、第45～46小節の第1部分と第47小節以降の第2部分とに分かれている。尚、第47小節に於いては、第1部分の末尾と第2部分の開始部分とを重複させている。

第1部分は、模倣形式でセットになっているテノールとバス、ソプラノとアルトの各組に、モチーフaとモチーフa'を宛っている。そして、3小節目では、前記の通り早くも第2部分を重ねて開始している。

第47小節からの第2部分は、第1部分とは形式を異にし、モチーフcにモチーフd、f、e、を組み合わせている。そして、最後の第52～53小節ではヘミオーラのリズムで、和声的進行方法をもって第1区分をで閉じている。

転調楽節は1箇所設けられている。即ち、第45小節より3小節間続いた、と音によるオルゲルプントを根音とした第47小節3拍でのト長調主和音を、ハ長調

属和音と見て第48小節1拍でその主和音に解決している。

第2区分（第54小節～第59小節2拍）の第1部分は、第54小節ではテノールとアルトを、そして、第55小節ではバスとソプラノを各々セットにして、モチーフaのみを一度或いは八度の模倣で繋いでいる。

第2部分は、第56小節2拍とアウフタクトより、ソプラノにモチーフfを置き、アルト以下の3声には、第56小節3拍とアウフタクトより、モチーフe'をそれぞれ2回ずつ続け、最後の第57～58小節をヘミオーラのリズムを用い簡潔に第2区分を締めている。

第3区分〔後奏〕（第59小節～第67小節）は、後奏として独立した構成をしているが、ここでは、分類上第3区分の枠内に納めた。

第1部分は、コーラスの部が終息する第59小節に重ねて、ヴィオラのモチーフaから始めている。そして、1拍ずつ遅れて、ヴァイオリンI、ヴァイオリンIIの順でモチーフaが続く。第60小節1拍からは、低音部に続いてヴァイオリンIがモチーフaで追っている。

ところで、同小節で特異な変化が見られる。それは、低音部とヴァイオリンIのモチーフaの間にヴィオラのモチーフcとヴァイオリンIIのモチーフfが第2部分のモチーフを先行して挿入されていることである。

第2部分では、更に変化が加えられている。先ず、第62小節1拍からヴァイオリンIIとヴィオラが、モチーフcを1拍ずらして1セットとし、第63小節では、ヴァイオリンIとヴィオラが、同じくヴァイオリンIを1拍ずらして1セットを作り、下屬調の関係で模倣している。そして、既出の組み合わせのように、ヴァイオリンIのモチーフcにはモチーフdが1回続き、ヴァイオリンIIにはモチーフdが2回付加されている。

更に、特徴的な変化が見られる。それは、第63小節のヴィオラのモチーフcの2回目には、バスのモチーフfが続き、次の第64小節にはヴィオラ、次いで第65小節ではバスにと、モチーフfが連携しながら、ヴァイオリンI、IIのモチーフfに巧みに錯綜させながら添えて作られていることである。

転調楽節は2箇所見られる。第1回目は第61小節2拍のハ長調主和音を、ト長

調下屬和音と見て、属七の和音からその主和音の六の和音に解決している。第2回目は第62小節3拍でト長調主和音をハ長調属七の和音と見て、第63小節1拍でその主和音に解決している。

第3展開のモチーフの構成について、解説の文中と重複する部分があるが、改めて簡潔に纏めてみると、第1区分の第1部分は、モチーフaのみが主体となっているということである。そして、第2部分では、モチーフcが主体となり、それぞれにモチーフd、モチーフf、モチーフeが付加されるという形を取っている。

第3区分の第1部分では、モチーフaが主体となっているが、第60小節には第2部分でのモチーフcとモチーフfを先取る形で挿入している。

第2部分では、モチーフcを主体とし、それにモチーフdやモチーフfを付加するという手法を用いている。

かくして、第65～66小節にはヘミオーラのリズムを用い、最後は簡潔なカデンツをもって、41. 合唱曲を終わっている。

「XIII. 神の裁き」

42. 叙唱 テノール ニ長調～ホ長調
 < 主は一笑に付し >

42. Recitativo Tenore D major～E major
 He that dwelleth in heaven

先ず、曲の構成の一覧表を示す。

[表6]

小 節 数	1.	2.	3.	4.
区 分	a			b カデンツ
調 性	D:V ₆	- $-\frac{6}{5}$ - ₂	I	IV ₂ [#] I
転調楽節				E:V ₂ - ₃

上記の〔表6〕に示した如く、先ず、区分については、テノールの旋律を基準にして見ると、最初より第3小節1拍までのaの部分と、第3小節3拍とアウフタクトより最後までまでのbの部分とに分かれている。

次に、調性については、二長調属七の第3転回であるV₂の和音を、第2小節3拍と第4小節1拍とに2回用いている。これらの和音は、〈 shall laugh them to scorn 〉 と 〈 shall have them in derision 〉 の歌詞に基づいている。この意味内容を表現するにあたって、不安定な転回和音の響きを、二度までも強拍上にぶつけるという方法を用いて強調したところに、ヘンデルの解釈と作曲上の意図が窺える。

転調楽節については、1箇所設けられている。即ち、第4小節1拍に於いて、二点二音にシャープを付して二長調六度上の七の和音の第3転回を作り、これをホ長調属七の二の和音と見てそのカデンツに繋いでいる。

尚、テノールの八分音符に種々の役割を与えている箇所が見られる。第一に、第1小節4拍裏の二点二音は、経過音として用いられている。第二に、第2小節2拍裏の二点ト音は、属七の七度上の音として付加されている。第三に、第2小節4拍裏の二点二音は、補助音でもあり、また第3小節への先取音の働きもしている。最後の第4小節2拍裏に置かれた二点ホ音は、補助音として付けられているが、もしも3拍頭で二点ホ音とした場合は、次のカデンツの解決和音への先取音となる。尚、この場合は別の問題が生じる。即ち、ヘンデルの自筆楽譜では、3拍でのテノールの一点口音とカデンツの属和音を重ねることについて、和音上では問題は無い〔譜例7〕。所が、テノールが3拍頭の一点口音をアボジャトゥーラとして二点ホ音とした場合は、カデンツの属和音の二点嬰二音とは短二度の音程となり、対策を考慮する必要がある。

〔譜例7〕

ヘンデルの自筆楽譜

Tenore

Continuo

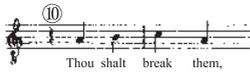
He that dwelleth in Heaven shall laugh them to scorn: the Lord shall have them in derision.

43. 詠唱 テノール アンダンテ イ短調
 < 鉄槌を下す >

43. Air Tenore Andante a minor
 Thou shalt break them with a rod of iron

先ず、主なモチーフを示す。

[譜例 8]

a. Tenore 

b. Tenore 

c. Violino I, II 

d. Violino I, II 

e. Violino I, II 

f. Violino I, II 

g. Bassi 

次に、モチーフの配列による構成の一覧表を示す。

[表 7]

第1展開

展開	小節数	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15.
I	区分	前奏 ①
	<i>Violino I, II</i>	c dc dc dc dc dc de c dc dc d c
	<i>Tenore</i>	a a b
	<i>Bassi</i>	d d d d d d d d d d
	調性	a:

展開	小節数	15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30.
"	区分	② i ii
	<i>Violino I, II</i>	c dc d c dc dc de c dc dc f
	<i>Tenore</i>	a d b a d db'
	<i>Bassi</i>	d d d d d d a d d f
	調性 転調楽節	a:vi ₄ I ₆ I I ₆ I ₇ [♯] I C:V G:IV C:V ₇ ① ② ③ ① (第16小節1拍~第17小節1拍) ② (第18小節1拍~第19小節1拍) ③ (第21小節1拍~第23小節1拍)

第2展開

展開	小節数	30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43.
II	区分	間奏 ①
	<i>Violino I, II</i>	c dc dc de c dc dc dc d
	<i>Tenore</i>	a a' b'
	<i>Bassi</i>	d d d d d d f
	調性 転調楽節	I i a:III (第35小節1拍~2拍)

展開	小節数	43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58.
"	区分	② i ii
	<i>Violino I, II</i>	c d d d d d c d c d
	<i>Tenore</i>	a' b' a db' b'
	<i>Bassi</i>	d d d d d d g g g g g
	調性	-

展開	小 節 数	58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71~74.
"	区 分	iii 後奏
	<i>Violino I, II</i>	c d e c dc dc dc dc dc de
	<i>Tenore</i>	a d b'
	<i>Bassi</i>	d d d f d d d d d d
	調 性	-

第1展開（第1小節～第30小節）は、基調をイ短調として始め、前奏（第1小節～10小節）、第1区分（第10小節～第15小節）、そして、第2区分（第15小節～第30小節）で構成されている。

（注）区分の境界線でモチーフが交錯する小節に於いては、文中にて補足説明をすることとする。

前奏（第1小節～10小節）は、三つの部分に分かれ二部形式となっている。

(a) は、第1小節より第4小節の頭まで、(a') は、第4小節より第7小節の頭まで、そして、(b) は、第7小節より第10小節の頭までとなっている。

（注）：(a)、(a')、(b) については〔表8〕を参照。

(a) は、ヴィオラを除いたヴァイオリン I、II のみで、モチーフcとモチーフdをセットにして3回連ねている。そして、低音部では、イ音からハ音まで、モチーフdによるラメント風順次下行旋律を置いている。

(a') は、ヴァイオリン I、II によるモチーフc、dを3回連ねているが、(a) を模倣をした形式であり〔表8〕、低音部ではラメントバスのリズムに僅かに変化を加えている。

[表 8]

小 節 数	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7. 8. 9. 10.
区 分	(a)			(a')			(b)
<i>Vl. I, II</i>	c	dc	dc	dc	dc	dc	e
<i>Bassi</i>	d		d	d	d	d	d
	ラメント風バス			ラメントバス			ヘミオーラ
和声進行	a: i	v ₆ iv ₆	i ₄ ⁶ iv	i ₆ ii iv ₄ ⁶	V ₆ v ₆ ⁴ / ₆	vi [#] iv ₆	V ₇ カデンツ i

(注) 第43番ではラメントバスが特に頻繁に用いられている。そこで、ラメントバスの表記について、本稿に於いては、基本形とされる「四度の音程で六個の音符をもって順次下行進行するフレーズ」を正規の「ラメントバス」とし、その他の類似したフレーズを「ラメント風バス」と記して区別している。

(b) は、八分音符を主体としたリズムに変化し、特に第7小節には八分音符2個ずつを繋ぐためにスラーが書き込まれている。また、第8～9小節にはヘミオーラのリズムが見られ、最後はカデンツで前奏を締め括っている。

この曲に関して、弦楽器群では特に、第1小節より第6小節までの (a) と (a') については、各小節の2拍から3拍頭にかけてのスラーの記号と、直後の3拍裏と次の小節1拍いかけたの2個の音符に書き込まれた鋭いアクセントの記号とが際だったコントラストをなしている。(a) と (a') に相対しての (b) は、全く対称的な異なったリズムを持つモチーフ e を宛っている [譜例 9]。

[譜例9]

ヘンデルの自筆楽譜

第1区分(第10小節～第15小節)は、テノールのモチーフaを2回とモチーフbを並べ、それに、ヴァイオリンI、IIにモチーフcとモチーフdを3回、そして、低音部に前奏での(b)の部分のラメント・バスを模倣するという簡潔な形で終わっている。

第2区分(第15小節～第30小節)は、第1部分(第17小節～第22小節)と、第2部分(第22小節～第30小節)に分かれている。そして、冒頭のヴァイオリンI、IIのモチーフcとモチーフdを2回模倣し、低音部では、モチーフdを2回用いての極く簡単な小間奏を作り、第17小節からのテノールの詠唱を誘い出している。

第1部分(第17小節～第22小節)は、小間奏に誘導された主旋律のテノールが、モチーフa、モチーフd、モチーフbと繋げている。そしてヴァイオリンI、IIは、第18小節よりモチーフcとモチーフdを3回連ね、最後にモチーフeを付加している。これに対し低音部は、テノールより1拍遅れてモチーフdを4回連ね、且つ、二音からと音まで順次下行進行でラメント風バスを形作っている。

転調楽節は2箇所見られる。大きな変化は、第1区分のイ短調の流れを第2区分でハ長調に模様替えをしていることである。即ち、第1回目は、第16小節1拍

で低音部のト音をナチュラルとして、イ短調七度上の和音と捉え、これをハ長調属和音と見て、第17小節1拍でその主和音の六の和音に不完全終止の形で解決している。次に、第2回目は、第18小節1拍のハ長調主和音をト長調下屬和音と見て、第19小節1拍で第17小節1拍と同様に、ト長調主和音の六の和音に不完全終止の形で解決している。

第2部分（第22小節～第30小節）は、直前の第21～22小節のヴァイオリンI、IIのみによる小間奏に誘われる形で、低音部を伴ったテノールが、第2区分第1部分を模倣する形で、モチーフa、d、bを連ねている。但し、この場合は、モチーフdを2回反復し、更に、モチーフbをb'としてフレーズを2倍の長さに延長している。

ヴァイオリンI、IIは、モチーフcの音程を二度ずつ順次に上げて3回繰り返し、モチーフfを付加して終わっている。

転調楽節は、第1部分と第2部分に跨る形で行われている。即ち、第2区分の第3回目として、第21小節でのト長調主和音上の七の和音を、ハ長調の属七の和音と見て、第23小節1拍でその主和音に完全終止のカデンツをもって解決している。

それを受けた低音部は、モチーフdの音程を二度ずつ順次に上げて3回繰り返し、その3回目をモチーフfの初めとしてヴァイオリンI、IIに同調させ、テノールの末尾に併せて、ヘミオーラのリズムを形作った後、カデンツをもって第2区分を閉じている。

第2展開（第30小節～第74小節）は、間奏（第30小節～第35小節）、第1区分（第35小節～第43小節）、第2区分（第43小節～第65小節）そして、後奏（第65小節～第74小節）とで構成されている。

間奏（第30小節～第35小節）は、先ず、第1展開第2区分の第1部分を模倣して、ヴァイオリンI、IIによるモチーフcとモチーフdを3回連続反復し、モチーフeを付加して一区切りとしている。次に、低音部は、ハ音からと音にかけてラメント・バスの流れを作りながらモチーフdを3回連続し、最後は、ヘミオーラを形成してハ長調のカデンツをもって間奏を終わっている。

第1区分（第35小節～第43小節）は、形式的には第1展開第2区分の第2部分を模倣しているが、僅かずつ変化を加えている。先ず第一に、ヴァイオリンI、IIは、モチーフcとモチーフdを4回の反復で止めている。第二に、既出の第24～25小節に於いて2回反復したモチーフdについて、僅かに手を加え、モチーフa'とモチーフb'に変えている。低音部も第22～23小節に置いていたモチーフaをはずし、モチーフdを3回用いてラメント風バスを作り、変化したモチーフfを付加している。

転調楽節を見ると、第35小節1拍でハ長調の主和音に解決した直後、これをイ短調三度上の和音と見て、第36小節でその主和音に解決している。かくして、基調であるイ短調に戻した調性を最後まで持続しているのである。

第2区分（第43小節～第65小節）は、第1部分（第43小節～第49小節）、第2部分（第49小節～第58小節）、第3部分（第58小節～第65小節）と後奏（第65小節～第74小節）で構成されている。

第1部分（第43小節～第49小節）は、第1区分の最後の第43小節に重ね、低音部のカデンツにも支えられて、ヴァイオリンI、IIのモチーフcとモチーフdが先導している。次いでモチーフdを4回反復し、一点嬰ハ音から一点ト音まで順次上行進行している。

テノールは1小節遅れて、更に変化を加えたモチーフa'とモチーフb'を並べている。

低音部は、第44小節1拍でカデンツによるイ短調主和音に解決した後、第44小節3拍裏より第48小節2拍まで、ヴァイオリンI、IIのモチーフdと同じ上行進行の形のユニゾンでもって上声を支えている。

第2部分（第49小節～第58小節）は、第1部分の末尾の第49小節にヴァイオリンI、IIのモチーフcとモチーフdを重ねて開始している。

それを受けて、低音部が第49小節3拍裏から第52小節までのラメント・バスと、新しいモチーフgとをもって、第52小節より5回に亘って上行進行で反復しながら、上声を支えている。

その間、先ずヴァイオリンI、IIは、第51小節にモチーフcとモチーフdを再度追加した後は5小節間休止している。

次にテノールは、第50小節2拍より、モチーフaとモチーフdに続けて、更に変化したモチーフb'を2回続けている。尚、第56小節3拍からの2回目のモチーフb'はヘミオーラのリズムを伴いカデンツをもって終わっている。

第3部分（第58小節～第65小節）は、第2部分の冒頭の部分を模倣して開始している。即ち、先ず、第58小節のヴァイオリンI、IIが第2部分の末尾に重ねて開始していること、次に、低音部が同型のラメント・バスで引き継いでいること、更に、テノールが第59小節2拍よりモチーフaとモチーフdを再現していること等である。但し、第59小節のテノールに於いて、第50小節では付点四分音符と八分音符であったものが、四分音符2個に変えられている点のみが異なっている。

後半の第61小節とアウフタクトからは、ヴァイオリンI、IIがモチーフeで繋ぎの役割を果たし、第62小節3拍からは低音部のモチーフfに支えられて、テノールがモチーフb'でヘミオーラのリズムを作り、カデンツをもって第3部分を終わっている。

後奏（第65小節～第74小節）は、声楽部のテノールが終わった第65小節に重ねて、ヴァイオリンI、IIが6回連続のモチーフc、モチーフdを開始している。

それに併せて、低音部が第66小節とアウフタクトからモチーフdを6回用いて添えている。尚、このモチーフdの6回中、前半の3回は上行進行し、後半の3回はラメント・バスを用いて対称的に下行進行している。

第71小節からは、ヴァイオリンI、IIにモチーフeを与え、最後はヘミオーラのリズムとカデンツをもって、**43. 詠唱**を閉じている。

「XIV. 神の王国出現」

44. 合唱 アレグロ ニ長調
 < ハレルヤ! >

44. Chorus Allegro D major
 Hallelujah!

先ず、主なモチーフの一覧を示す。尚、和声的に進む中で、和音内での音符の置換や、旋律の微調整については、基本的なリズムパターンに含めることとし、次の九つのモチーフに纏めた。

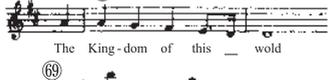
[譜例10]

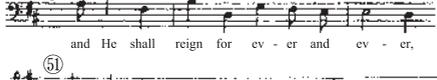
a. *Soprano* 

b. *Soprano* 

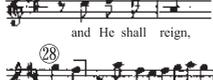
c. *Soprano* 

d. *Soprano* 

e. *Soprano* 

f. *Basso* 

g. *Soprano* 

h. *Soprano* 

i. *Violino I* 

次に、モチーフの配列による構成の一覧表を示す。尚、オーボエ I、IIは、ソプラノ・パートの補強用として全く同じ旋律が記されているために、重複を避けて省略することとする。

[表 9]

第1展開

展開	小節数	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.			
I	区 分	① 前奏		i				ii							
	<i>Tromba I</i>														
	<i>Tromba II</i>														
	<i>Timpani</i>														
	<i>Violino I</i>	a	a	c	a	a	b	b	c	a	b	b	b	c	b
	<i>Violino II</i>	a	a	c	a	a	b	b	c	a	b	b	b	c	b
	<i>Viola</i>	a	a	c	a	a	b	b	c	a	b	b	b	c	b
	<i>Soprano</i>				a	a	b	b	c	a	a	b	b	c	
	<i>Alto</i>				a	a	b	b	c	a	a	b	b	c	
	<i>Tenore</i>				a	a	b	b	c	a	a	b	b	c	
	<i>Basso</i>				a	a	b	b	c	a	a	b	b	c	
	<i>Bassi</i>	a	a	c	a	a	b	b	c	a	a	b	b	c	
	調 性	D:								I I					
転調楽節									A:IV						
	(第7小節3拍～第8小節1拍)														

展開	小節数	12.	13.	14.	15.	16.	17.	18.	19.	20.	21.	
”	区分	② i					ii					
	<i>Tromba I</i>				b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Tromba II</i>				b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Timpani</i>				b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Violino I</i>	d			b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Violino II</i>	d			b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Viola</i>	d			b b b ⁺	d				b b b ⁺		
	<i>Soprano</i>	d			b b b b	d				b b b b		
	<i>Alto</i>	d			b b b b	d				b b b b		
	<i>Tenore</i>	d			b b b b	d				b b b b		
	<i>Basso</i>	d			b b b b	d				b b b b		
	<i>Bassi</i>	d			b b b b	d				b b b b		
	調性	I I										
転調楽節	D:V (第11小節3拍～第12小節1拍)											

第2展開

展開	小節数	33.34.35.36.37.38.39.40.41	42.43.44. 45. 46. 47. 48. 49. 50.51.
II	区分	① i ii	② i ii iii iv
	<i>Tromba I</i>	e e' e'	
	<i>Tromba II</i>	e e' e'	
	<i>Timpani</i>	e e' e'	
	<i>Violino I</i>	e e e' e'	f h h' f
	<i>Violino II</i>	e e e' e'	f b b h'
	<i>Viola</i>	e e e' e'	f f b b h'
	<i>Soprano</i>	e e ⁻ e' e'	f
	<i>Alto</i>	e e ⁻ e' e'	f b b h'
	<i>Tenore</i>	e e ⁻ e' e'	f h h' h' b'
	<i>Basso</i>	e e ⁻ e' e'	f b h h' b b b h' b'
	<i>Bassi</i>	e e e' e'	f f ⁻ b h h' b h' b b b h' b'
調性	D: I I I ₆	vi I I ₆ I ₆ vi I	
転調楽節	A:IV II ₆ D:V (第39小節3拍裏～ 第40小節2拍)	A:ii D:V ₆ A:ii ① ② ③	
		① (第45小節1拍～同小節2拍) ② (第46小節1拍～同小節3拍) ③ (第50小節1拍～同小節2拍)	

展開	小節数	69.70.71.72.73.74.	75.76.77.78. 79.80.81.	82.83.84.85.86.87.88.
”	区分	iv	② i ii	③ i ii
	<i>Tromba I</i>		g g bf	g g g g f
	<i>Tromba II</i>		g g bf'	g g g g f'
	<i>Timpani</i>		bb bb'bf'	g g g g f'
	<i>Violino I</i>	f	g bb g bb f i'	i i i i f
	<i>Violino II</i>	h h h h'	g bb g bb i f' i'	i i i i i'
	<i>Viola</i>	hh' h h'	g bb g bb f'	i' i' i' i' f'
	<i>Soprano</i>	h f	bb bb f'	g g g g f
	<i>Alto</i>	h h h'	g bb g bb f	g g g g f'
	<i>Tenore</i>	hh' h h'	g g f	g g g g f'
	<i>Basso</i>	f hh'	g bb g bb f	g g g g f
	<i>Bassi</i>	f h'hhh' f-	bb bb f	g g g g f
調性 転調楽節	<p>I I</p> <p>D:V</p> <p>(第71小節3拍～第72小節1拍)</p>			

第4展開（コーダ）

展開	小節数	88.	89.	90.	91.	92.	93.	94.		
IV	区分	i			ii			カデンツ		
	<i>Tromba I</i>	g	g	g	b'	b'	"			
	<i>Tromba II</i>	g'	g	g	b'	b'	"			
	<i>Timpani</i>	b	b	b	b	b	b'	b	"	
	<i>Violino I</i>	b	b	b	b'	b'	b'	b'	b	"
	<i>Violino II</i>	b	b	b	b'	b'	b'	b'	b	"
	<i>Viola</i>	b	b	b	b'	b'	b'	b'	b	"
	<i>Soprano</i>	g	g	b	b	b	b	"		
	<i>Alto</i>	b	b	b	b	b	b	b	"	
	<i>Tenore</i>	b	b	b	b	b	b	b	"	
	<i>Basso</i>	b	b	b	b	b	b	b	"	
	<i>Bassi</i>	b	b	b	b	b	b	b	"	
	調性	D:								

第1展開（第1小節～第33小節）は、第1区分（第4小節～第11小節）、前奏（第1小節～第3小節）、第2区分（第12小節～第21小節）そして、第3区分（第22小節～第33小節3拍）で構成されている。

第1区分（第4小節～第11小節）は、前奏（第1小節～第3小節）に続く第1部分（第4小節～第7小節）と、第2部分（第8小節～第11小節）に分かれている。

前奏（第1小節～第3小節）は、僅か3小節間で出来ており、編成は弦楽器部（注）のみとし、しかも、指揮用楽譜には <senza rip.> と記入されている。そして、モチーフaを2回繰り返し、第3小節ではモチーフcによる簡潔なカデンツをもってこの大曲の導入としている。

（注）本稿に於いては、管・弦・打・通奏低音等の楽器群が個別に奏される場合が多く見られるため、声楽部に倣って、管楽部・弦楽部等のよう

に「群」に替えて「部」を用いたり、又、単独に演奏される場合には、適宜個々の楽器名を表記することとする。

第1部分（第4小節～第7小節）は、先ず、声楽部を見ると、前奏のリズムを受け、更に全パートのリズムを揃えて、モチーフaを2回置き、続いてモチーフbを2回続け、カデンツに変化を加えたモチーフcをもって一区切りとしている。

尚、モチーフb <Hallelujah> の和声進行は、変格終止の <T-S-T> の形（転調した場合は目的調での変格終止）を終わりまで一貫して用いており、リズム共々この曲の特徴をなしている。尚、第63小節よりの例外的扱いについては後述することとする。

弦楽器部は、2拍遅れて、更に下行進行に変化したモチーフaを添えた後、第7小節3拍からの反復部分のヴァイオリンI、IIは、1オクターヴ高い位置に上げられており、更に、<con rip.> の記号が指揮用楽譜に書き込まれていることも注意点である。

続くモチーフbとモチーフcは声楽部より2拍遅れの後打ちのリズムで添えられており、特に、モチーフcは、第8小節からの第2部への橋渡しの働きをしている。

第2部分（第8小節～第11小節）は、先ず、第7小節3拍のカデンツで解決した二長調の主和音を、更にイ長調の属和音と見て、第8小節1拍でその主和音に解決し、属調での展開としている。

声楽部に於けるモチーフの連結や和声進行については、全体が五度高められた音域内での和音操作となっているものの、殆どが第1部分の模倣となっている。

弦楽器部に於いては、モチーフの連結方法に変化の兆しが見られる。即ち、第1部分では、モチーフaが2回反復されていたのに対して、第2部分では、2回目のモチーフaがモチーフbに置き換えられている。更に、最後の第11小節では、モチーフcを早めて1拍からとし、第4拍とアウフタクトからモチーフbを付加して、第1部分の最後と同様に転調楽節の用意をしている。つまり、第11小節4拍でのイ長調の主和音を二長調の属和音と見なして、第12小節1拍からの調性を基調の二長調に戻している。

第2区分（第12小節～第21小節）は、第1部分（第12小節～第16小節）と第2部分（第17小節～第21小節）に分かれている。

第1部分（第12小節～第16小節）は、趣を変えて、声楽部と弦楽器部でもって、新しい主題のモチーフdが <tasto solo> で3小節間歌われる。続く第15小節とアフタクトからは、トランペット2本とティンパニをも加えた全パートでもってモチーフbが奏される。尚、モチーフbの反復方法については、声楽部では4回の繰り返しであるが、管弦楽部では後半の2回分が、休止符無しで3回分の繰り返しを含めてモチーフb+に纏めた形としている。

第2部分（第17小節～第21小節）は、第1部分を模倣した形となっているが、モチーフdの <tasto solo> の開始音が第12小節では二長調五度上の属音となっているのに対して、第17小節では主音からの開始となっている。

第3区分（第22小節～第33小節3拍）は、第1部分（第22小節～第24小節）、第2部分（第25小節～第28小節）そして、第3部分（第29小節～第32小節）に分かれており、各部分はモチーフdを軸として、モチーフbとモチーフcを組み合わせるとい手法を用いている。主題であるモチーフd等の配置換えと併せて述べることにする。

第1部分（第22小節～第24小節）は、ソプラノとヴァイオリンIに主題であるモチーフdを置き、弦楽器部を含む他のパートはモチーフbとモチーフcを絡めている。

第2部分（第25小節～第28小節）は、低音部を伴ったバスとテノールが主題であるモチーフdを受け持ち、他のパートがこれに交互に絡める形となっている。この第2部分で、特にトランペットI、IIとティンパニが加えられている点は見逃せない。

転調楽節が2箇所設けられている。第1回目は第26小節2拍の二長調主和音を、イ長調下属和音と見て、第27小節3拍に於いてその主和音に流れこんでいる。更に、この第27小節3拍に於いて解決したイ長調主和音を、二長調属和音と見て、第28小節1拍でその主和音に解決している。

第3部分（第29小節～第32小節）は、主題であるモチーフdを内声のアルトとテノールに置き、他のパートはこれにモチーフbとモチーフcを応答さ

せながら組み合わせている。特に重要と思われる特徴は、弦楽器部と共に、更にトランペット I がモチーフ d をもって添えられているということである。

これらの組み合わせは、微細を極めているため、特に、第2部分と第3部分を次の表にて纏めることとする。

[表10]

小節数	25.	26.	27.	28.	29.	30.	31.	32.	33.
区 分	ii				iii				
<i>Tr. I</i>	~~~~~			~~~~~		—————			~~~~~
<i>Tr. II</i>	~~~~~			~~~~~		—————			~~~~~
<i>Timp.</i>	~~~~~			~~~~~		—————			~~~~~
<i>Vi. I</i>	~~~~~			~~~~~		~~~~~			~~~~~
<i>Vi. II</i>	~~~~~			~~~~~		~~~~~			~~~~~
<i>Viola</i>	~~~~~			~~~~~		~~~~~			~~~~~
<i>Sop.</i>	~~~~~			~~~~~		~~~~~			~~~~~
<i>Alto</i>	~~~~~			~~~~~		—————			~~~~~
<i>Ten.</i>	—————			~~~~~		—————			~~~~~
<i>Basso</i>	—————			~~~~~		~~~~~			~~~~~

- (注1) ————— モチーフ d
 ~~~~~ モチーフ b  
 ~~~~~ モチーフ b<sup>+</sup>  
 ~~~~~ モチーフ c

(注2) 上記(注1)で示した各モチーフの頭が、縦線で纏めたように、〈Hallelujah〉のモチーフ b の頭と殆ど一致している。但し、縦線が各モチーフの線の途中を通り越している場合は、基本的にはこの問題と無関係である。

次に、[表10]に記入しきれなかったモチーフ b に関して、〈Hallelujah〉の語のアクセントに当たる <-lu-> の箇所と、補強の役割の管・弦・打各楽器

との関連について検討する。

[表11]

第3区分、第2部分

| 小節数           | 25.  |      |      |      | 26.  |      |      |          | 27.  |      |      |      | 28.  |      |      |      |
|---------------|------|------|------|------|------|------|------|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 拍数            | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3.   | 4.       | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   |
| <i>Tr. I</i>  |      | *    | *    |      | *    |      | *    |          |      |      |      |      | *    |      | *    |      |
| <i>Tr. II</i> |      | *    | *    |      | *    |      | *    |          |      |      |      |      | *    |      | *    |      |
| <i>Timp.</i>  |      | *    | *    |      | *    |      | *    |          |      |      |      |      | *    |      | *    |      |
| <i>Vi. I</i>  | *    |      | *    |      | *    |      | *    | *        |      |      |      |      | *    |      | *    | *    |
| <i>Vi. II</i> |      | *    | *    |      | *    | *    | *    | *        |      |      |      |      | *    |      | *    | *    |
| <i>Viola</i>  |      | *    | *    |      | *    | *    | *    | *        |      |      |      |      | *    |      | *    | *    |
| <i>Sop.</i>   | -lu-     | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- |
| <i>Alto</i>   |      | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu-(le) | -lu- |
| <i>Ten.</i>   |      |      |      |      |      |      |      |          |      |      |      |      | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- |
| <i>Basso</i>  |      |      |      |      |      |      |      |          |      |      |      |      | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- |
| <i>Bassi</i>  |      |      |      |      |      |      |      |          |      |      |      |      | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- |

(注) \*印は、〈Hallelujah〉の〈-lu-〉を補強した管・弦・打楽器群の箇所を示している。

尚、例外的に管・弦・打楽器群が独自のリズムで和音を埋めたり、また、第26小節4拍や、第32小節2拍のように、単語のアクセントとは関係無く、先ず音楽的な処理を行い、後からその音符に言葉を当てはめたとと思われるような箇所も見られる。

第3部分

| 小節数           | 29.  |      |      |      | 30.  |      |      |      | 31.  |      |      |      | 32.  |      |      |      | 33.  |      |    |  |
|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|----|--|
| 拍数            | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3.   | 4.   | 1.   | 2.   | 3. |  |
| <i>Tr. I</i>  |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | *    | *  |  |
| <i>Tr. II</i> |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | *    | *  |  |
| <i>Timp.</i>  |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | *    | *  |  |
| <i>Vi. I</i>  |      | *    |      | *    |      | *    |      | *    |      |      |      | *    |      | *    |      | *    | *    | *    | *  |  |
| <i>Vi. II</i> | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    |      |      | *    | *    | *    |      | *    | *    | *    |    |  |
| <i>Viola</i>  | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    | *    |      |      | *    | *    | *    |      | *    | *    | *    |    |  |
| <i>Sop.</i>   | -lu- |    |  |
| <i>Alto</i>   |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- | -lu- |    |  |
| <i>Ten.</i>   |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      | -lu- |    |  |
| <i>Basso</i>  |      | -lu- |    |  |
| <i>Bassi</i>  |      | -lu- |    |  |

小間奏（第32小節4拍とアウフタクト～第33小節3拍）は、簡潔に変格終止をもって第1展開を締め括り、次の展開への接続詞の役割を果たしている。

第2展開（第34小節とアウフタクト～第51小節2拍）は、第1区分（第34小節とアウフタクト～第41小節2拍）と、第2区分（第41小節3拍とアウフタクト～第51小節2拍）で構成されている。

第1区分（第34小節とアウフタクト～第41小節2拍）は、第1部分（第34小節とアウフタクト～第37小節3拍）と、第2部分（第38小節とアウフタクト～第41小節2拍）とに分かれている。そして、いずれも、和声的進行をしているのが特徴である。

第1部分（第34小節とアウフタクト～第37小節3拍）は、更に、前半と後半に分かれている。まず前半は、管・打楽器を除く弦楽器部と声楽部とで、モチーフeによる和声的進行となっている。次に、後半の第36小節とアウフタクトからの弦楽器部は、前半のモチーフeを反復する形をとっている。また、声楽部は

休止符を挿入する形の変化を加え、アルトは第36小節2拍目より、そして、他の3パートは1拍遅れの同小節3拍目より、といずれもモチーフe<sup>-</sup>を用いた簡潔なカデンツをもって一区切りとしている。

**第2部分**（第38小節とアフタクト～第41小節2拍）は、全パートのリズムを揃えて、モチーフeに続き、モチーフe'を2回連続して用いたフレーズを作っている。

尚、一時的ではあるが、転調楽節が見られる。即ち、第39小節3拍の二長調主和音をイ長調下屬和音と見て、第40小節1拍でその主和音に入り、更に、そのイ長調主和音を二長調屬和音と見て、同小節2拍裏でその六の和音に入り、第41小節1拍で元の二長調主和音に解決している。

**第2区分**（第41小節3拍とアフタクト～第51小節2拍）は、第1部分（第41小節3拍とアフタクト～第43小節3拍）、第2部分（第44小節とアフタクト～第46小節1拍）、第3部分（第46小節2拍～第48小節3拍）と第4部分（第49小節とアフタクト～第51小節2拍）で構成されている。そして、この区分はフーガ形式で書かれている。

**第1部分**（第41小節3拍とアフタクト～第43小節3拍）は、先ず主題が、バスでもって二長調 <tasto solo> で提示される。

**第2部分**（第44小節とアフタクト～第46小節1拍）は、バスの主題を受けたテノールが、ヴァイオリンIとヴィオラを伴って、イ長調で応答を歌う。

**第3部分**（第46小節2拍～第48小節3拍）は、再び主題をヴァイオリンIIとヴィオラを伴ったアルトが、二長調で歌う。

**第4部分**（第49小節とアフタクト～第51小節2拍）は、ヴァイオリンIを伴ってソプラノが応答を歌う。

第2部分以降での主題と応答に対する対旋律は、主にモチーフbとモチーフhが対位的に小刻みに組み合わせられている。例外としては、低音部の第44小節とアフタクトから3個の音符で、応答の片鱗がモチーフf<sup>-</sup>として見られる。

この間、フーガ形式をとっているために、当然のことながら、次の3箇所の主調と属調の関係で転調が行われている。第1回目は、第45小節1拍から同小節2

拍にかけて、二長調からイ長調へ。第2回目は、第46小節1拍から同小節3拍にかけて、イ長調から二長調へ。そして、第3回目は、第50小節1拍から同小節2拍にかけて二長調からイ長調へと転調しているのである。

**第3展開**（第51小節3拍～第88小節1拍）は、第1区分（第51小節3拍～第74小節2拍）、第2区分（第74小節3拍～第81小節1拍）そして、第3区分（第81小節3拍～第88小節1拍）で構成されている。

**第1区分**（第51小節3拍～第74小節2拍）は、第1部分（第51小節3拍～第57小節2拍）、第2部分（第57小節3拍～第63小節2拍）、第3部分（第63小節3拍～第69小節2拍）そして、第4部分（第69小節3拍とアウトタクト～第74小節2拍）に分かれている。

第1区分は、モチーフgを2個ずつ重ねたフレーズを1単位として、3回繰り返している。但し、第67小節3拍からは、モチーフgを2回たたみ込む形で付加している。そして、最後にモチーフfを2回繰り返すという手法となっている。

**第1部分**（第51小節3拍～第57小節2拍）は、第51小節2拍より第56小節まで、ソプラノとアルトによるモチーフgが2回続く。そして、他の全パートでもって不完全終止の特徴的なモチーフbを8回添えている。但し、トランペットIは、第55小節2拍より第57小節2拍まで、モチーフbの4回分に替えて、モチーフgを宛っているのが印象的である。

**第2部分**（第57小節3拍～第63小節2拍）は、先ず、第1回目の転調楽節として、第57小節1拍裏のイ長調主和音を二長調属和音と見て、同小節3拍よりその主和音に解決している。そして、ソプラノは第57小節3拍より第63小節2拍まで、トランペットIと共に、モチーフgを2回繰り返している。

第58小節からは、トランペットIIとティンパニ以外の全パートが、モチーフbをもって第1部分を模倣しながら前半で4回繰り返している。

後半に移る所に第2回目の転調楽節がある。即ち、第60小節3拍の二長調属和音を、ホ長調下屬和音と見て、第61小節2拍裏でその主和音の六の和音に解決している。そして、後半はホ長調でもってモチーフbを4回繰り返している。

注意すべきは、モチーフgの繋ぎ目が、第54小節1拍は四分休符であったものが、第60小節1拍では、タイで結ばれた四分音符が記入されているということである。

また、弦楽器部のモチーフbの繋ぎ方に僅かずつ変化を加えている点も見逃がせない。即ち、それまでモチーフbが八分休符で区切られて独立していたものが、第58小節からの最初の2個のモチーフbの間に、八分音符を挿入することにより、一つのフレーズに結びつけている。

更に、第61小節からは同様に、3個のモチーフbが一つのフレーズに纏められているということにも注意が必要である。

**第3部分**（第63小節3拍～第69小節2拍）は、先ず、第3回目の転調楽節を経て始められている。即ち、第64小節2拍裏のホ長調二度上の長三和音（第三音にシャープ）の六の和音を、ロ短調属和音の六の和音に置き換え、第64小節3拍頭でその主和音に解決している。

ここで注目すべきは、これまでモチーフbの和声進行がT-S-Tであったものを、D-T-Dに変化していることである。しかし、それまでのT-S-Tのパターンで考えると、嬰へ長調でのT-S<sub>(b)</sub>-Tとも見る事が出来ることは興味深い。

ソプラノが第63小節3拍より第66小節2拍まで、トランペットIと共に、モチーフgを2回繰り返す方法はこれまでの形を模倣しているが、第66小節3拍とアフタクトより後半にかけては、様々な変化の試みが見られる。

即ち、先ず、第66小節のソプラノとトランペットIが、同小節1拍～2拍に於いて、付点四分音符と八分音符に替えられている。

次に、第67小節よりの後半のソプラノとトランペットI以外の全パートに関して、それまでのモチーフb 8個分が、モチーフgとモチーフg'に替えられている。尚、第68小節3拍とアフタクトからのソプラノとトランペットIも、モチーフg'に替えて、他の全パートとリズムを合わせているのである。

転調楽節が第68～69小節に2回見られる。即ち、第4回目は、第68小節1拍のロ短調七度上の五六の和音を、二長調の属和音の五六の和音と見て、同小節3拍でその主和音に解決している。そして、第5回目はその二長調の主和音をイ長調の下属和音と見て、第69小節1拍に於いてその主和音に解決している。

第4部分(第69小節3拍とアウフタクト～第74小節2拍)は、前半部分を低音部を伴ったバスが、応答を先行させてモチーフfを歌う。続いて、後半部分をヴァイオリンIを伴ったソプラノが基調での主題を歌う。他のパートは、モチーフh或いはモチーフh'をもって対位的に処理している。

尚、第70小節4拍とアウフタクトから第71小節3拍までのテノールとヴィオラのモチーフh'は、モチーフc'の部類に属するという見方も出来る。

また、第71小節4拍とアウフタクトから第72小節1拍にかけて、モチーフfとモチーフf'の一部を低音部に重ねて書き込んでいる[譜例11]。これは、第71小節4拍とアウフタクトからのアルトをヴァイオリンIIとともに低音部でも補強する為のものと考えられる。

そして、これらは、同小節の4拍目でソプラノとヴァイオリンIと同一音であることから、モチーフfを誘導し且つ補強するための処置と思われる。

更に、ヘンデルは自筆楽譜に、特に第71小節3拍より4つの八分音符を符尾で結んでいるのが目を引く。これは、1拍後に始まるモチーフfの最初の音を、低音部の強拍部に於いて、あらかじめ提示しておくという意図のあらわれとも解釈される。

[譜例11]

ヘンデルの自筆楽譜

The image shows a handwritten musical score for five vocal parts: Soprano, Alto, Tenore, Basso, and Bassi. The score is written on five staves. The Soprano part has the lyrics "and He shall reign" and "and". The Alto part has the lyrics "and He shall reign - and He shall reign - for and e". The Tenore part has the lyrics "and for and He shall reign" and "for and e". The Basso part has the lyrics "and He" and "and". The Bassi part has the lyrics "and forever am". There are circled numbers 71 and 72 above the staves, indicating measures. The notation includes various rhythmic values and accidentals.

第2区分(第74小節3拍～第81小節1拍)は、第1部分(第74小節3拍～第78小節1拍)と第2部分(第78小節3拍とアウフタクト～第81小節1拍)に分かれ

ている。

第1部分（第74小節3拍～第78小節1拍）は、テノールとトランペット I、II が軸になって、モチーフ g を 2 回繰り返している。これに対して他のパートの参加の方法に、次の二通りがある。(a) は、モチーフ g の最初から共に開始して、次の小節の 1 拍まで加わり、続いて、第75小節3拍とアウフタクトと第77小節3拍とアウフタクトからの 2 箇所でもチーフ g を中断し、モチーフ b に切り替えてそれを 2 回ずつ繰り返す。(b) は、第75小節3拍とアウフタクトと第77小節3拍とアウフタクトからの、モチーフ b が 2 回ずつセットで繰り返す箇所だけに途中参加する。

尚、注目すべき重要な点は、第74小節より第77小節にかけての、弦楽器部へのアクセント記号の記入と、アルト、テノールとバスの歌詞である [譜例12]。

[譜例12]

ヘンデルの自筆楽譜

⑦④ *mf*

Tromba I, II

Timpani

Violino I

Violino II

Viola

Soprano

Alto

Tenore

Basso

Bassi

*Ma le regis*

*King's - and the*

*over King of Kings, who - and the*

*Halle lya - ante for.*

以上の組み合わせを終えた後、第78小節1拍裏から、トランペットⅠ、Ⅱとティンパニによるモチーフb'を接続詞として、次の部分への繋ぎとしている。

**第2部分**（第78小節3拍とアフタクト～第81小節1拍）は、第78小節とアフタクトからのバスのモチーフfと、1拍半遅れの第78小節4拍からのアルトのモチーフfとの、ストレッタ用法による構成で出来ている。そして、バスは低音部を伴い、アルトはトランペットⅠとヴァイオリンⅠとを伴っている。尚、和音を埋めるために更に、バスには、ヴィオラ、ソプラノそして、テノールが添えられ、また、アルトにはヴァイオリンⅠがティンパニとともに添えられている。

注目すべき重要な点は、ヴァイオリンⅡの配置である。即ち、第78小節3拍とアフタクトより第79小節4拍頭までのモチーフiは、第3区分からの弦楽器群のフレーズを先取りして提示している。そして、このモチーフiのリズムを、ヴァイオリンⅠは第81小節とアフタクトから、また、ヴァイオリンⅡは第81小節1拍裏からと、順に受け継ぎながら先行の役目と、第3区分への接続の働きも果たしているのである。

**第3区分**（第81小節3拍～第88小節1拍）は、第1部分（第81小節3拍～第85小節1拍）と第2部分（第85小節3拍とアフタクト～第88小節1拍）に分かれている。

**第1部分**（第81小節3拍～第85小節1拍、但し、ヴァイオリンⅠ、Ⅱは同小節3拍まで延長）は、弦楽器部を除いた他の全パートが揃ってモチーフgを奏している。尚、その配置は、モチーフg 2個を1セットとして、単純に2回繰り返している。しかし、注意して観察すると、外見は同じように見えるが僅かに変化を加えていることが分かる。

先ず、声楽部を軸に考察する。第1点は、ソプラノと低音部を伴ったバスとのリズムは同一である。また、ティンパニも、アルトとテノールのリズムと全く同じである。

第2点は、ヴァイオリンⅠとヴァイオリンⅡは、オクターヴの差はあるものの、アルトとテノールを模倣している形は同一である。しかし、第83小節4拍の3回目のモチーフgのリズムは、第81小節4拍の1回目のモチーフgを反復した

ため、アルトとテノールの第83小節4拍の四分音符とは異なるリズムとなっている。

第3点は、第82小節2拍裏と第84小節2拍裏の各八分音符の音程の問題である。即ち、アルトとテノールは、直後の第3拍の音と同一の音がアウフタクトとして置かれている。それに対して、ヴァイオリンIとヴァイオリンIIの第82小節2拍裏と、第84小節2拍裏の各八分音符は、直前の第1拍の音と同じ高さの音に配置されており、次の第3拍へは三度の音程差を生じている事が異なる点である。

ヴァイオリンI、IIについては、他のパートと異なり、第2区分最後の第81小節1～2拍のモチーフiの流れを受けて、第81小節3拍裏より第82小節3拍頭までのモチーフiを4回繰り返している。ヴィオラもモチーフiを4回添えている。

**第2部分**（第85小節3拍とアウフタクト～第88小節1拍）は、先ず、第85小節3拍とアウフタクトから低音部を伴ったバスがモチーフfをもって先導している。これには、ヴィオラが同時にモチーフfを添えている。そして、1拍半遅れて、トランペットI、ヴァイオリンIとソプラノがモチーフfを、そして、トランペットII、ティンパニ、アルトとテノールがモチーフfを一斉に奏する形をとっている。

尚、ヴァイオリンIIのみはモチーフiのリズムを継承し、モチーフiの形で第86小節4拍頭まで延長している。

**第4展開 コーダ**（第88小節3拍～第94小節）は、第1部分（第88小節3拍～第90小節1拍）と第2部分（第90小節3拍とアウフタクト～第94小節）に分かれている。

**第1部分**（第88小節3拍～第90小節1拍）は、先ず、ソプラノがモチーフgを2回歌い、トランペットI、IIがモチーフgをもってこれを補強している。尚、トランペットI、IIのモチーフgの末尾に付加された八分音符2個による分散和音のリズムが、弦楽器部にも引き継がれ、倍の十六分音符2個と八分音符にたたみ込まれ、声楽部と交互に掛け合う特徴的なリズムのきっかけを作っていることは見逃せない。

他の全パートは、既出の形で、モチーフb 2個を1セットにして反復して

いる。

**第2部分**（第90小節3拍とアウフタクト～第94小節）は、再度トランペット I、IIによるモチーフgを聞きながら、全声楽部と全器楽部とで4回のモチーフbによるアンティフォーンの後、2拍の四分休符を置いて、教会終止（変格終止）をもって壮大な **第44曲 ハレルヤ・コーラス** を閉じるとともに、第22曲から続いてきた第2部を締め括っているのである。